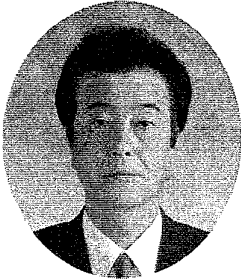


## 提言



# 教科における郷土素材の活用の在り方

～21世紀を創造的に生きる知恵を育むために～

鹿児島大学教育学部教授  
同附属幼稚園長・小学校長

畠澤 郎

## 1 はじめに

新世紀を生きる子供の教育指針としての新学習指導要領実施が目前に迫ってきた。周知のように、今次改訂では、地域や学校の特色を生かしていく裁量の幅が大きく広げられることが大きな特徴である。

近年の子供を取り巻く環境は悪化の傾向を呈している。少子化とともに家庭や地域社会の教育力が低下し、子供たちは様々な体験や創造的な活動をする場が狭められつつある。すなわち、覚えた知識を働かす機会の減少が子供たちに学習意欲を失わせ、学業不振をはじめ種々の問題行動を引き起こす等の大きな要因となっているといえよう。

こうした中、「郷土学習の振興について」（新世紀カリキュラム審議会 郷土学習振興委員会 平成12年10月）の審議経過報告、及び「鹿児島の特色を生かした教育課程の在り方等について」（新世紀カリキュラム審議会 平成13年2月）の答申は、時宜にかなっており、鹿児島の新しい学校教育の方向を示すものである。

## 2 郷土学習の今日的な意義

これまでの我が国の教育を顧みると、子供に個性や創造性を発揮させることよりも、ともすると受験に向けた知識の量を競わせるような指導に陥りがちであった。一方、社会全体がめまぐるしく変化して人間関係が希薄化する中、子供たちは急速に進む情報化社会からの影響を受けて多種多様なメディアに埋没してしまっている。人との関わりの欠如が、優しさとか助け合いといった思いやりの心やモラルの低下を生み出している。

いうまでもなく、教育は家庭や地域そして社会全体で取り組むべきものであり、決して学校のみが担うものではない。しかし、このような現象が及ばず諸問題の解決が学校の役割とされ、これが教師に大きな負担となって重くのしかかっている。

こうした中で今、「地球規模で考え、地域から行動する」ことが提唱され、鹿児島の郷土を素材として創造的な学習活動を展開しようとする提案は、21世紀を生きる人間の知恵を育むために大きな教育的価値があろう。すなわち、精神的なよりどころとしての郷土を知り、先人の知恵や蓄積されてきた文化等を学ぶことを通して、グローバルな視

点で物事を考えることができる人間教育、更には、未来を生き抜く知識や知恵を創造していくことができる能力を育成することが教育の重要な課題であろう。

鹿児島は、他に類例を見ない程の豊かで多彩な自然環境、南に開かれた地理的条件、個性ある歴史、文化等々の良さをもっている。これらの特色を生かした郷土の学習に関する取組はこれまでも関係諸機関によって推進されてきたことが報告されている。それによると、「青少年自立自興運動」、「ふるさと心」、「きらめく星～新時代をひらいた人～」等の読み物、パンフレット、手引き、ビデオ資料。また、「山坂達者実践推進事業」、「ふるさとに学ぶさつまっ子事業」等の事業。そして、それぞれの学校の各教科等における取組として、郷土の伝統的な芸能・行事の継承や発表、伝統産業に関する体験学習、郷土の先人に学ぶ活動、郷土の自然の調査・見学等である。

これらの郷土学習は、学習指導要領の方針の一つである「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を養うこと」の視点からも評価されるものである。国際理解教育は、まず、子供が自分の住む郷土の自然、文化、伝統、歴史等に対する理解を深め、これらを楽しむ心を育むことを基盤として進められていくべきものである。そして、国の内外の学校との交流を通し、鹿児島の情報を発信したり、異文化を理解したりする中で、世界の人々とともに生きていこうとする心情を養っていくのである。

### 3 郷土学習の展開とその課題

こうした郷土学習のこれまでの取組は一定の成果を挙げているようであるが、社会現象として子供たちと地域との繋がりが希薄化し、その推進基盤が弱体化する傾向にあることには危惧の念を抱かざるを得ない。

県教育委員会の調査によると、小学校段階では郷土に関心を持ち、郷土の文化に対する興味をもっている子供は相当な割合になるが、中学校や高校段階ではそうした興味や関心などが必ずしも高まっていないという。この調査結果について審議経過報告では、郷土学習の充実と発展のための改善点を挙げているが、整理すると次のようになろう。

その第一として、郷土学習について公的教育機関同士が連携をとって推進することである。先に挙げた県教育委員会、財団法人県育英財団、県立博物館、学校等において取り組んできた内容は、各機関の対象とする相手（人間層）に違いがあり、企画もおのずと異なるものであろう。今後、創造的に生きる知恵を育むための郷土学習の在り方について、意識的な統一のもとに進めるよう努力することが求められている。

第二として、校種間や地域社会等と連携を密にして、郷土学習に関する情報を共有できるような指導体制のもとに推進することである。それぞれの学校ごとの体験活動が場当たり的なものに陥ってしまったり、取り組んだ実践がそこで留まってしまったりということもあるようである。数多い郷土学習について、地域社会や他の学校等と広く情報を交換し合うとともに、教育的価値やその有効性について検討を加えながら、子供の発

達段階に応じた教材化を進める必要がある。

第三として、郷土学習に関しての指導者研修を行う必要があることである。学校現場において、実際指導にあたる個々の教職員が、郷土の素材を教材化して活用する方法に戸惑ったり、素材そのものの存在を知らなかったりという現実もあるようである。先に挙げた刊行物や諸事業、実践校の記録、更には、埋没してしまっている素材の発掘等、これらを資料として整理するとともに、それらの活用方法についての研修を深めていくような環境づくりが大切となろう。

#### 4 教材群の整備とカリキュラムへの位置付け

郷土学習振興委員会では、鹿児島における郷土学習の基礎・基本として、「自然」、「文化」、「伝統」、「歴史」、「産業」の五項目の分類のもとに、小学校中学年、同高学年、中学校と発達段階を三つに区分し、例示している。これは、それぞれの学校で実践する上で一つのガイドラインとなるものである。郷土の学習を着実に推進していくためには、前項で挙げた改善点について検討を加えるとともに、五項目それぞれについて、発達段階や活動のねらいを明確にした教材群を整備する必要がある。

ここでは、「文化」における音楽についての一例を提案してみたい。鹿児島ならではの音楽といえば、天吹、薩摩琵琶、ゴットン、島唄等であるが、天吹を取り上げてみた。

天吹（たて笛）は、尺八に似た竹笛で、韓国の国民的楽器のタンソともよく似ている。素朴な楽器であり、子供でも容易に作ることができる。音域は、小学校三年生頃から学習するソプラノリコーダーに近いことから、中学年以降の扱いとなろう。「音色をきく」（中学年 音楽）、「作る」（高学年 図工）、「吹く」（高学年 音楽）、「尺八とのきき比べ」（高学年 音楽）、「韓国のタンソを知る」（中学校 音楽）等が考えられよう。

このように、素材のキーワードをもとに各分野ごとに教材化を進め、教材群としてまとめるとともに、学年や教科等の配当を検討してカリキュラムの中に組み入れる。その中から、学校や子供の実態にふさわしいものを精選して、指導計画に位置付けるようにする。

数多い素材についての作業量は膨大なものとなろうが、子供たちの未来のために、地域の人材の協力をも仰ぎながら、着実に推進されるよう願うものである。

#### 5 おわりに

郷土学習は、子供たちにとって単なる知識や理解に終わるのではなく、体験することを通す中で、生きて働く知恵として身に付くものでなければならない。学校裁量の幅が拡大されることは、それなりに責任が増すということである。鹿児島県における教育の成果については、いずれ評価を通して明らかになるであろう。教育関係機関の今後の取組、そして、一人ひとりの指導者の一層の工夫と努力に期待したい。